

病院における作業療法

特集にあたって

日本における作業療法は、介護予防から急性期・回復期・生活期・終末期と多岐にわたって行われている。医療分野は入院日数の短縮が進んでいるものの、世界の中では比較的優遇されているだろう。回復期リハビリテーション病棟もこの国の特徴であり、勤務している OT 数が非常に多い。しかしながら、すべての Stage へ関与できる体制であることは、世界的にめずらしい。であれば、わが国の作業療法は私たちが創るしかない。すべての国民に作業療法を、これを展開するための情報発信のひとつとして本誌がある。

近年、機能分化されている医療・介護分野では、OT の役割の明確化が求められている。超高齢化社会を迎えるこの国では、2025 年の地域包括ケアシステム構築に向け、「病院」から「地域へ」という流れの中でその仕組みが再編されつつあるだろう。一方、「病院」は急性期から終末期まで、その役目がある。作業療法のあり方も異なるはずだ。

今回、急性期病棟から回復期リハビリテーション病棟・地域包括ケア病棟・療養病棟、そして緩和ケア病棟におけるそれぞれの作業療法の意義とともに実践報告を述べていただいた。読者が勤務している病棟での作業療法のあり方の再確認・新たな発見があるかもしれない。また、他病棟での作業療法の展開を知ることによって「今の自分の立ち位置」を知ること大切だろう。「連携」が重要な今の時代だからこそ、本特集テーマがある。ぜひ、熟読していただきたい。

(山本伸一)

企画担当

三瀬和彦 (甲府城南病院, 作業療法士)

中村春基 (一般社団法人 日本作業療法士協会, 作業療法士)

山本伸一 (山梨リハビリテーション病院, 作業療法士)